

英語資格に関するニーズ分析

— 長崎ウエスレヤン大学の英語教育に何が求められているのか —*

林 千 晶**

An Analysis of Students' Needs: Towards a Formal Education of the TOEIC Test

Chiaki Hayashi**

キーワード 英語教育 ESP TOEIC

概 要

近年の教育機関における資格検定試験を目安とした成果主義傾向のもと、その実態を客観的に把握し、現状に則したカリキュラム改善へ繋げるため、長崎ウエスレヤン大学の学生の英語資格に関する意識を調査し、その回答を基にニーズ分析を行った。アンケート調査の対象授業は必修科目のCALL English (A・B・Cクラス)、選択科目である資格検定英語Ⅱ・Ⅳ、英語科教育法Ⅲ、パースペクティブ・リーディングⅢ。調査対象は105名、その9割は1年生である。主な質問項目は4つ:「英語資格検定試験における受験経験」・「英語資格の重要性」・「勉強方法に関する意識」・「教師に対する要望」。調査結果では、受験経験の項目から、中学・高校における外部試験に関する指導状況が明らかとなった。TOEICの重要性の認識と就職との関連性からは、TOEICへの意識向上を促進する必要がある、その対策には就職ガイダンスとの連携やその早期化が鍵となることが示唆された。また、学生はTOEIC対策に特化した学習を望んでおり、読解力や単語力を伸ばす必要性を感じていた。更に、教師に対しても資格検定試験の受験経験が必要だと感じていることがわかった。

1. はじめに

大学入試の多様化は近年顕著な傾向であるが、長崎ウエスレヤン大学においてもAO入試や推薦入試など多彩な入試制度を採用しており、学生の多くは英語の学科試験を受けずに入学している。この傾向は、入学者間の学力のばらつきを引き起こす一因となっている(小野2004、高橋2005)。特に資格検定英語などの選択科目ではこの傾向が顕著であり、クラス内の学生達の英語力の差が大

きいため、授業の焦点が絞りにくくなっている。

また、文部科学省(以下:文科省)による『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』の中で具体的な達成目標が明示された影響か、中学校や高等学校での資格検定への意識は高く、英語教育の成果の指標として主に実用英語技能検定試験(以下:英検)が利用されているようである。一方、大学での英語教育の成果目標にはTOEICスコアが利用されている例が多い。パンフレットによると、本学国際交流学科では、TOEIC750点が達成目標として明示されている。

こうした傾向の実態を把握し、目標値の設定や教育現場に求められている対応について考察し、今後のカリキュラム改善に繋げるためには、まず学生達のニーズを知ることが必要である。そこで本稿では、学生の英語資格に対する意識についてのアンケート調査を実施し、これまでの受験経験や勉強方法、教師への要望などについての回答結果を基にニーズ分析を行いたい。

2. TOEIC活用の背景

TOEICとはTEST of English for International Communicationの略称で国際コミュニケーションにおける英語能力を評価するテストである。日本で発案され、TOEFLを実施している米国の非営利組織Educational Testing Service (ETS)が開発・制作し、運営・実施は実施国(現在60カ国以上)各々の委員会が担っている。日本では財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会が担当している。実施方法は、個人受験用の「公開テスト」が年8回(長崎県では年4回)あるほか、企業や学校などで受験できる団体受験制度「Institutional Program (IP) テスト」がある。長崎ウエスレヤン大学では2004年度よりIPテスト実施団体に加入しており、年2回(2007年度は7月と12月)実施している。

* Received January 31, 2008

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 社会福祉学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

IT Media News (2007) によると、1979年の試験開始以来TOEICの受験者数は年々増加傾向にあり、2006年度の受験者数は約152万6000人。前年度より2万7千人増加している。特にI Pテストでの伸びが著しく、2005年度より5万5千人増の約86万人が2006年度に受験している。団体受験増加の要因には、企業などにおける昇進・昇格要件のTOEICスコア引き上げが指摘されており、企業での活発な利用が示唆されている。

TOEICスコアは10点から990点まで5点刻みで評価されるシステムである。合格・不合格で判定される英検と異なり、学力の伸びが数値的に表示されるのが特徴であり、細かい目標設定が可能である。このため、受験や就職で活用される例も多い。

活用例としては、一般的には企業での採用が挙げられるが、国際ビジネスコミュニケーション協会(2007)によると、TOEICを活用している企業345社中、実際に採用目的で活用しているのは21社と少ない。本学キャリア支援室に寄せられる求人情報にも、数は少ないながら、スコアが明記されている例があり、航空関係企業では概ね600点以上が求められる。本学学生に直接関係するところでは、まず教員採用試験が挙げられる。自治体により要件は様々ではあるが、長崎県教員採用試験においては、平成14年度よりTOEIC850点以上で1次試験の専門科目(英語)試験が免除される。また、大学院入試でも活用されており、その数は現在約128校に上っている(国際ビジネスコミュニケーション協会 2007)。

TOEICテストの内容は日常生活やビジネスに関する英語コミュニケーションが中心で、新聞・雑誌記事、娯楽や広告、ホテルやレストラン、病院・駅・空港でのアナウンス、Eメールや手紙、ファックス、電話応対、交渉・契約・在庫確認、売り上げ実績やマーケティング、求人・求職活動と多岐に渡る。

英語教師としては、社会経験が乏しい学生達に対して、このように馴染みのない状況や場面設定での英語力を試すことにどれ程の意義があるのか疑問を感じる。また、外部テストの実績で英語力を単純に判断することには、安易な単位認定による学習機会の減少や英語力への誤解など、様々な弊害がある(島谷2007)。しかしながら、大学における学力保証として「TOEIC500点の英語力」が常識である現状、また、採用試験や大学院入試、更には就職後の昇格・昇進において、その要件としてTOEICスコアが利用されている実態を踏ま

えると、大学での取り組みが求められるのは必然である。

3. 調査対象と実施方法

3.1 調査対象

本調査は、長崎ウエスレヤン大学2007年度1年時必修科目のCALL Englishをはじめ、筆者が担当する選択科目(資格英語Ⅱ・Ⅳ、英語科教育法Ⅲ、パースペクティブ・リーディングⅢ)を履修している学生を対象とした。CALL Englishにおいては、習熟度別クラス編成のためA・B・Cクラスがあるが、担当教員の協力が得られ、全クラスで実施できた。調査実施方法は、2008年1月各授業の冬休み明け初回開始時にアンケート用紙を配布し回答してもらった。その結果、対象学生数は105名であった。学年構成は、図1のとおり1年生が90.5%、2年生が4.8%、3年生が3.8%、4年生は1%である。圧倒的に多い1年生については、調査時期が後期の授業を1カ月残した2008年1月7日であるため、ほぼ1年間の大学での学習経験を有する状態だと考えられる。長崎ウエスレヤン大学全体の実態を把握するには調査数が不十分ではあるが、英語に関する学生の意識の一端を示すものとしてその結果の分析を行いたい。

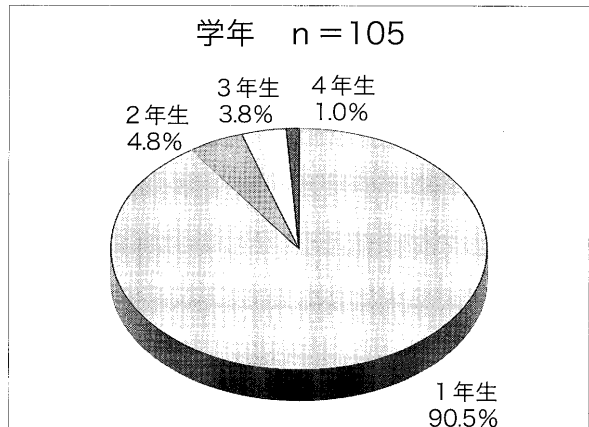


図1. 学年

3.2 アンケート用紙

アンケート用紙は、徳永(2007)の「学生が大学でのTOEIC対策に何を求めているのか」についての研究発表資料をもとに、主に「英語資格検定試験における受験経験」・「英語資格の重要性」・「勉強方法に関する意識」・「教師に対する要望」の4点の質問項目に関する調査を目的として編集した。本調査では、学生のニーズをより明確に把握するため、TOEIC以外の英語資格に関する受験経験・意識についての項目や、今後の受験予定、

そして各項目の回答理由に関する自由記述欄を追加した。更に、教師への要望や大学での英語授業に対する意見などの自由記述欄も設けた。

4. 調査結果

4.1 英語資格検定試験における受験経験

1) TOEICまたはTOEIC Bridgeの受験経験

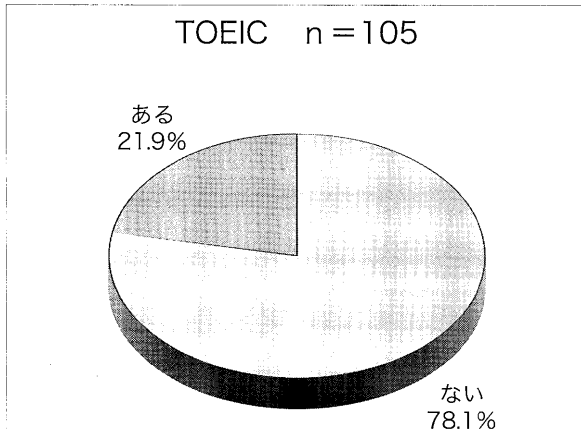


図2. TOEIC受験経験

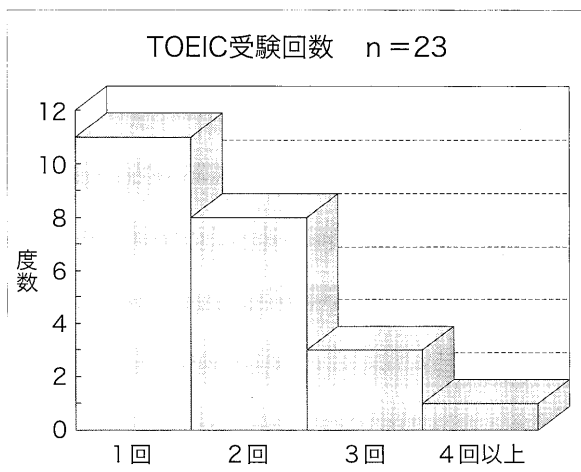


図3. TOEIC受験回数

「今までにTOEICまたはTOEIC Bridgeを受験したことがありますか。」という質問については、図2のとおり、受験経験がある学生は21.9%である。受験回数は平均1.74回で、最高は4回である。(図3参照)

TOEICの受験経験を有する学生は約2割ではあるが、複数回の受験を経験している例が多い。また、受験目的についての自由記述では、実力を知るため(10名)、留学のため(4名)、語学力向上のため(3名)、就職のため(3名)、将来のため(1名)、教師の指導のため(1名)と答えており、個人的動機や自己啓発による受験が多いことがわかる。

2) 英検

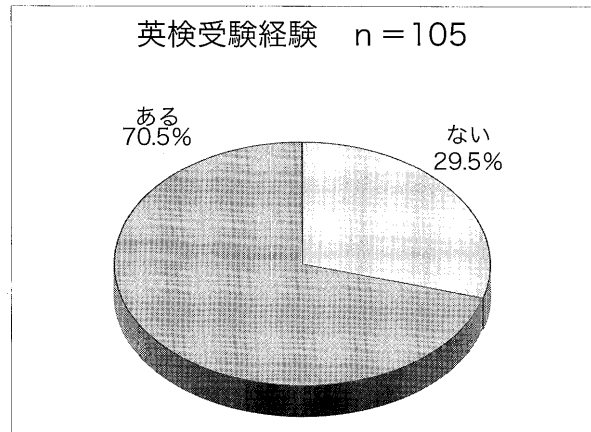


図4. 英検受験経験

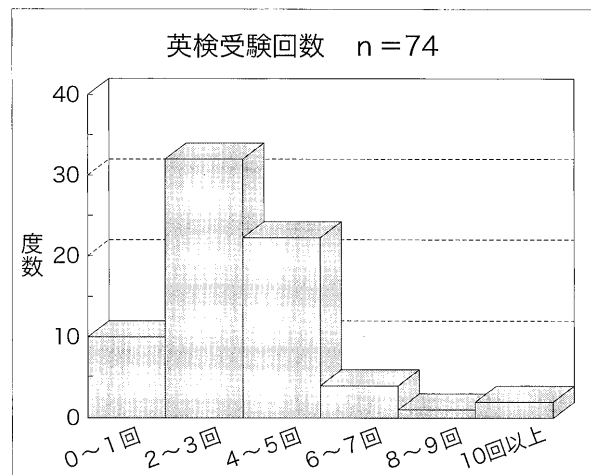


図5. 英検受験回数

「今までに英検を受験したことがありますか。」という質問については、図4のとおり、受験経験がある学生は70.5%である。実に7割以上の学生が受験経験を有しており、しかも受験回数は平均3.54回で10回以上の学生も少なくない。(図5参照) 受験目的についての自由記述によると、授業の一環などで強制的に小中学校や高校で受験させられたという記述が18名、教師の薦めやご機嫌取りのためが4名、高校・大学受験のためが6名で、学校での指導の影響が大きいということが明らかである。

また、資格取得のため(16名)、将来のため(5名)、就職のため(2名)、語学力向上のため(8名)、実力を知るため(4名)などが受験目的に挙げたことから、英検の将来役立つ資格としての認知度が高いことが示されている。

先に述べたとおり、文科省による行動計画には具体的な達成目標が明示されている。中学校卒業段階では平均英検3級程度、高等学校卒業段階で

は平均英検準2級～2級程度である。本調査の結果から、この計画の中学校や高等学校の教育現場へのインパクトは非常に大きいことが示唆された。

この行動計画では、大学での英語教育に関しては、「大学を卒業したら仕事で英語が使える」ことが目標であるとされており、具体的数値目標は示されていない。しかしながら、現在一般的に「TOEIC500点の英語力」が大学における学力保証の基準となっており、本学の設置基準においても謳われている。「仕事で英語が使える」という記述から、より実用的なイメージのあるTOEICが利用されていると考えれば、やはり影響は小さい。

3) 資格対策講座

「今までに学校などで資格英語の授業を受講したことがありますか。」という質問については、受講経験者は43.3%で、その64%（29人）が大学でTOEICを、そして42%（19人）が高校で、6.7%（3人）が小・中学校で英検に関する授業を受講しているという結果であった。

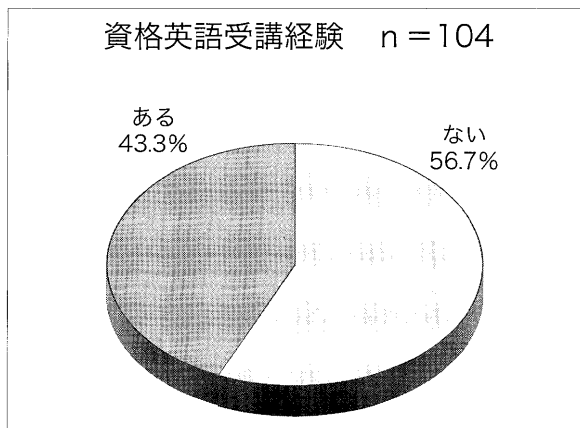


図4. 資格講座受講経験

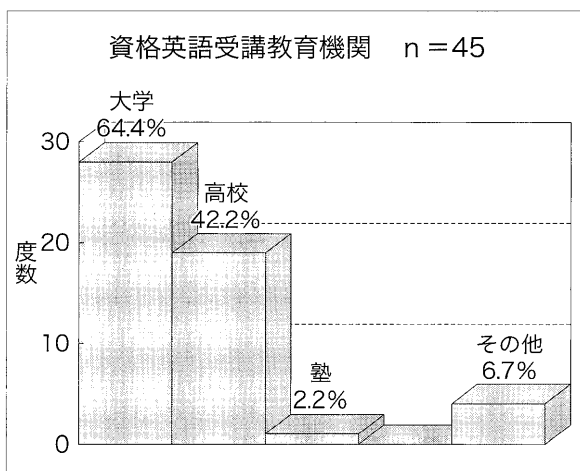


図5. 資格講座受講機関

4) 今後の英語資格

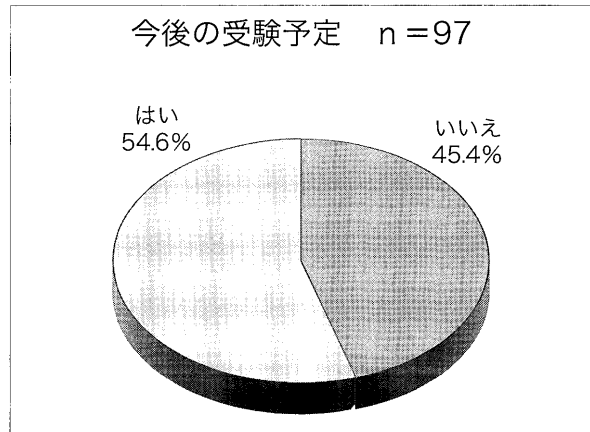


図6. 英語資格受験予定

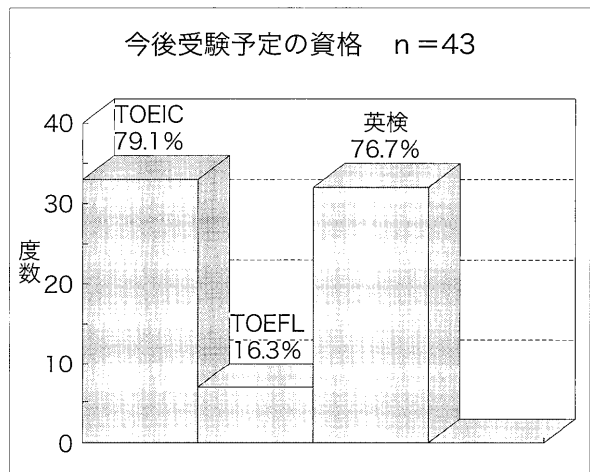


図7. 受験予定資格

図6によると、「今後は英語の資格試験を受験しますか。」に対する回答は、「はい」と答えた学生が約55%であり、資格試験の受験に対する意識は高いとは言い難い。

受験予定の資格としては、TOEIC 79.1%、TOEFL16.3%、英検76.7%であり、これまでの受験経験が多い英検に対して、TOEICが僅かながら上回っている点が注目される。（図7参照）

各資格の目標としては、TOEICでは図8のとおりかなりばらつきが見られる。700点以上が26.9%と多く、次いで500点と600点が23%で、400点が11.5%である。比較的目标値が高めなのは、経験不足や、一般的に履歴書に記載できるスコアは600点以上だと言われていることが影響していると考えられる。回答数は少なく26名であった。英検については、32名の回答があり、2級が一番多く40.6%を占めている。次いで1級が25%、準1級と3級が12.5%、準2級が9.4%である。

以上の結果より、現在の学生達がTOEICに比

べて英検に慣れていることがわかる。しかし今後の受験目標として英検以上に認識度が高いTOEICを、将来に繋がる新たな資格として導入することは、大学英語教育の重要な役割の一つであるようだ。実際、学生達のTOEICへの関心は高まっており、本学でのIPテストの受験者数においても、初回の2004年度22名（6月12名・12月10名）、2005年15名（7月11名・12月4名）、2006年度18名（7月7名・12月11名）に対して、2007年度は54名（7月21名、12月34名）と急激に伸びている。資格英語（Ⅰ～Ⅳ）の総受講者数も2006年度の31名に対して2007年度は61名と約2倍に増加している。

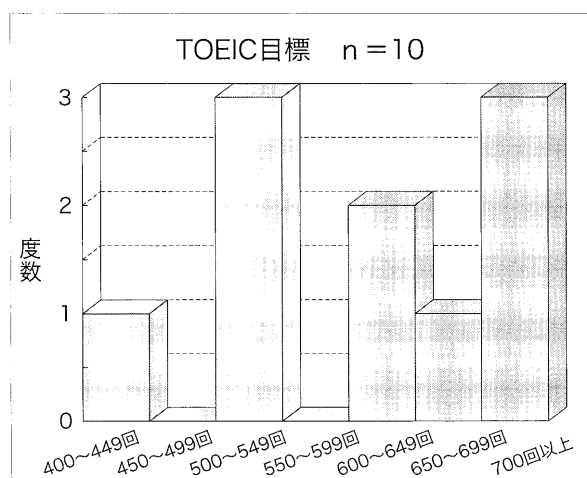


図8. TOEIC目標スコア

4.2 英語資格の重要性

「TOEICは自分にとって重要なテストだと思いますか。」という質問に対しては、「全くそう思わない」が8.6%で、「あまりそう思わない」が31.4%、「そう思う」が49.5%、「とてもそう思う」が10.5%であり、60%の学生が、重要性があると認識していた。大学の達成目標としてTOEICスコアを掲げている状況を考えると、この数値は十分とは言えず、認識度を高める策を講じる必要性が示唆された。

重要性の理由には、「就職に有利」が一番多く10件、「今後の社会では必要」9件、「留学・海外へ行く」5件、「自己啓発・英語力向上」5件、「国際共通語」2件、「資格取得」2件、他には「内容やスコアの幅が広い」が挙がった。一方、重要性が無い理由は、「必要性を感じない」3件、「将来の仕事に関係ない」・「実感がない」・「使わない」が各2件で、他には「社会福祉だから」・「不要な資格」があった。

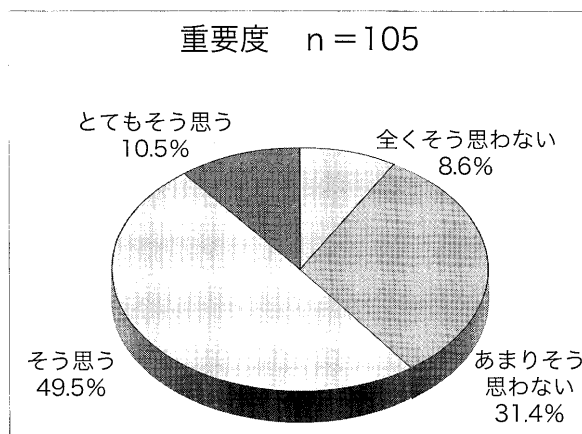


図9. TOEICの重要性

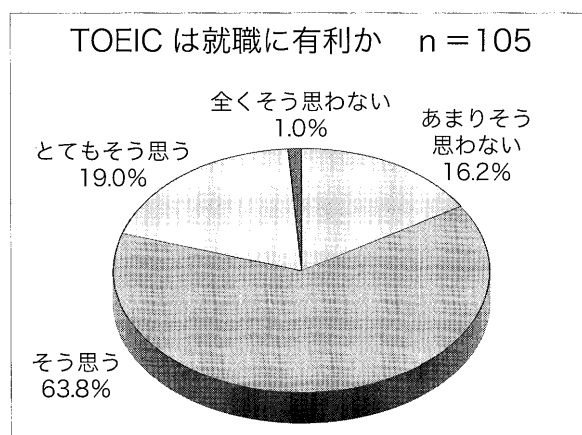


図10. TOEICは就職に有利か

図10のとおり「TOEICは就職に有利だと思いますか。」に対しては、「全くそう思わない」が1.0%で、「あまりそう思わない」が16.2%、「そう思う」が63.8%、「とてもそう思う」が19.0%であり、80%の学生がTOEICは就職に有利だと認識していた。理由の自由記述より、学生が英語を「国際語」とであると認識していること。そして、現在の社会を「国際社会」や「資格社会」と感じ、「資格があるに越したことはない」と考える傾向がみられる。

以上2項目の結果から、TOEICが就職に有利だという認識はあるが、自分にはまださほど重要だとは感じていない学生が多いようである。被験者の90%以上が1年生であることから、就職に対する意識が高くないことが要因と考えられる。しかしながら、国際交流学科以外、本学での英語教育は1・2年生に授業が集中しているため、実力アップに取り組める重要な時期はまさにこの期間であり、早い時期での意識向上促進への取り組みが必要である。

分析結果では、先行研究（McInness2005、徳永

2007)の結果と同様、TOEICと就職との関連性が強く示唆された。従ってTOEICの重要性の認識度を高め、積極的な取り組みを促すには、キャリアガイダンスなどの枠組みを利用して、就職や将来の仕事との関わりを印象付けることが有効だと考えられる。入学時など早い時期での就職に対する意識向上への指導を強化し、TOEICを関連付けて紹介することが意識向上へと繋がる可能性がある。

4.3 勉強方法に関する意識

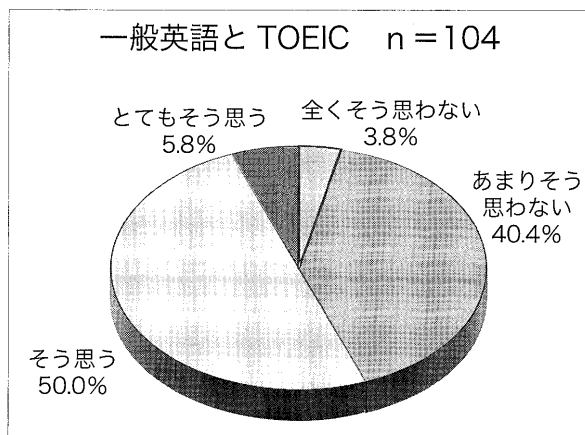


図11. 一般英語はTOEICに役立つか

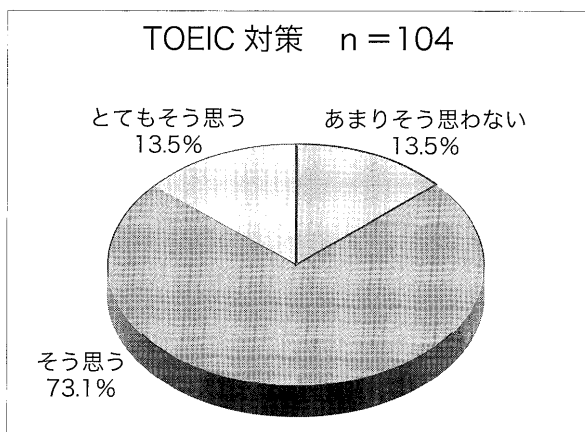


図12. TOEIC対策講座の必要性

「一般的な英語の勉強をすれば、TOEICスコアは伸びると思いますか。」に対しては、「全くそう思わない」が3.8%で、「あまりそう思わない」が40.4%、「そう思う」が50%、「とてもそう思う」が5.8%であり、約60%の学生が一般的英語力の向上がTOEICスコアと結びつくことを認識していた。(図11)

「TOEIC対策にはTOEICの問題を使った対策が必要だと思いますか。」に対しては、図12のとおり、「全くそう思わない」が0%で、「あまりそ

う思わない」が13.5%、「そう思う」が73.1%、「とてもそう思う」が13.5%であった。約9割の学生がTOEICに特化した対策が必要だと考えているという結果が出た。

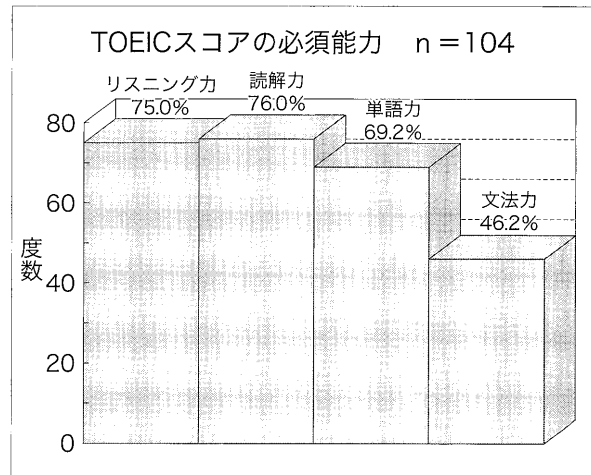


図13. TOEICの必須能力

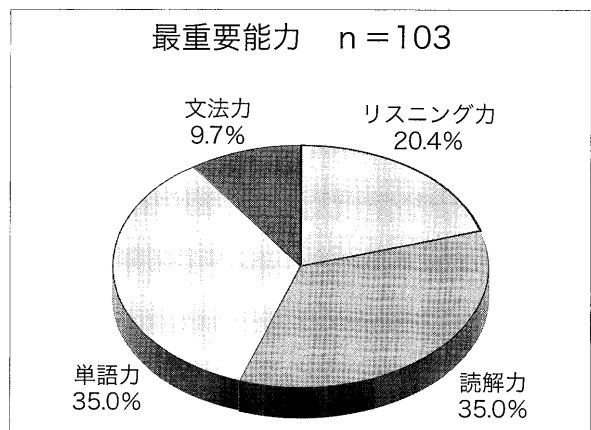


図14. TOEICの最重要能力

「TOEICのスコアを伸ばすのに、必要な能力は何だと思いますか。」に対しては、「読解力」が76%、「リスニング力」が75%、「単語力」が69.2%、「文法力」が46.2%であった。(図13参照)

「その中でも、一番重要だと思う能力はどれですか。」という問いについては、「読解力」が35%、「単語力」が35%、「リスニング力」が20.4%で、「文法力」が9.7%であった。(図14参照)

学生達はほぼ1年間の大学での学習を経た結果、「読解力」と「単語力」の必要性を感じているのである。「文法力」については、先行研究(高橋2005、徳永2007)と同様最も低く、文法を重要視しない傾向が明白である。要因の一つとしては、日本の中学・高校での英語教育における文法偏重が実用的な英語力習得の弊害になっているという考えが

一般化していることが挙げられる（徳永2007）。

しかしながら、「読解力」を育成するには、「単語力」に加えて「文法力」の養成が欠かせない。学生たちの期待に応えることと、望ましい授業を追求・実現することとは別次元である（高橋2004）。実用英語のレッスン内容が、単純な日常会話や表面的なテストスキルの訓練に終始したり、苦手意識のある学生への指導がその場しのぎ的では、大学の英語教育にふさわしいとは言えない（高橋2005）。基礎学力が大幅に不足している学生を対象に授業を補足する学習の義務を課す等、何らかの対策が必要である。

4.4 教師に対する要望

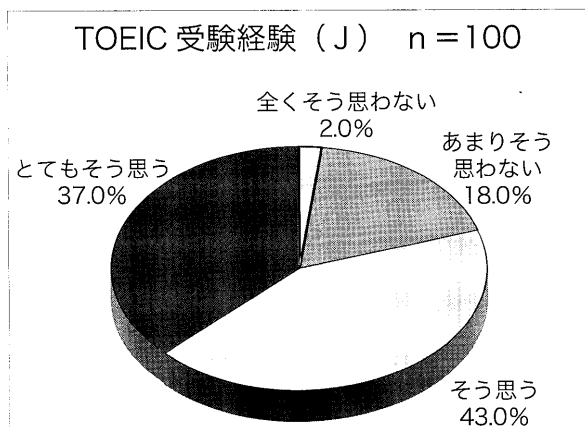


図15. 日本人教師の受験経験の必要性

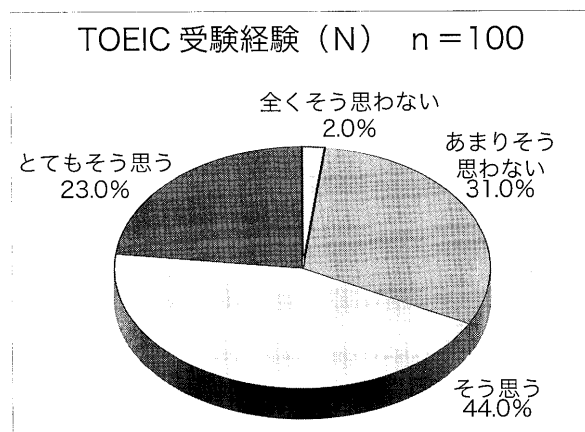


図16. ネイティブ講師の受験経験の必要性

「TOEIC対策を教える日本人の先生はTOEICの受験経験者であるべきだと思いますか。」という質問に対しては、図15のとおり、「全くそう思わない」が2%で、「あまりそう思わない」が18%、「そう思う」が43%、「とてもそう思う」が37%であった。80%の学生が、対策を担当する日本人の教師は実際の受験経験を有するべきだと考え

ていることがわかる。

一方、「TOEIC対策を教えるネイティブの先生はTOEICの受験経験者であるべきだと思いますか。」については、「全くそう思わない」が2%で、「あまりそう思わない」が31%、「そう思う」が44%、「とてもそう思う」が23%であり、67%の学生は、ネイティブ教師であっても受験経験を有する必要があると考えている。（図16参照）

これらの結果および自由記述から、TOEIC対策に関しては、「未経験者は信用できない」と考えており、ネイティブ教師より、日本人教師に対してより豊富な受験経験を求める傾向があるものの、双方の教師に受験経験を求めていることがわかる。

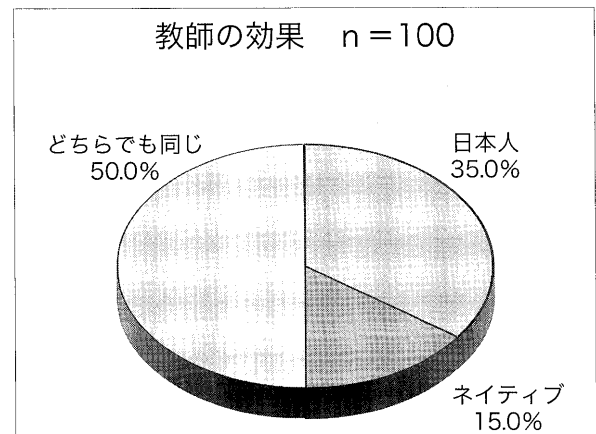


図17. TOEIC対策担当教師

「TOEIC対策のクラスは日本人またはネイティブの教師では、どちらが効果的だと思いますか。」という質問に対しては、図17のとおり、「日本人」が35%、「ネイティブ」が15%、「どちらでも同じ」が50%である。

理由の自由記述によると、日本人教師には、文法の解説や具体的な受験に関するテストスキルの伝授を求めている。また、ネイティブ教師に対しては「ついていけない」や「質問ができない」という危惧がある。一方、「ネイティブ教師が効果的」と答えた学生には、本場仕込みの英語を学習すべきという考えがある他、日本人教師よりコミュニケーションがとりやすいという意見もある。「どちらでも同じ」とは、学生自身のやる気次第だという意見であった。

クロス集計からは、先行研究（徳永2007他）と同様に、TOEIC受験経験のある学生は日本人教師が効果的だという意見を持つ傾向にあるとわかった。

200問に2時間で回答するという、速度と集中

力を求められるTOEICの指導には、専門スキルの習得が必要である。専門英語ESP (English for Specific Purposes) 研究での実践的アプローチとして、実際のテストの受験経験を積むことも方法の1つだと考えられる。

4.5 TOEIC対策担当教師への要望

「TOEIC等の英語資格対策を教える教師に何を求めるか、何か意見があったら記入してください。」という問いに対する自由記述については、表1にまとめた。わかりやすさや効率を求める中でも、文法学習や日常会話等の実用英語への要望も含まれている。

表1. TOEIC対策担当教員への要望

先生自身が英語のリスニング力を向上される。外国人講師は日本語能力の向上が必要。口頭で説明するだけでなく、文字を使った説明が必要。
厳しさ、わかりやすさ、テストによくでる問題を生徒にさせる。
TOEICそのものがよく分からないのではっきりとした意見をもてない。
教師の教え方は上手いですが、英語の苦手な人は大変なのでよろしくお願いします。
言い回し、フレーズを特に生徒が自分では勉強しにくいものを教えてほしい。
ユニーク性、どこまでわかりやすく教えてくれるか。
TOEICの様々な出題傾向について熟知してほしい。
教師はすべて教え方が上手いので何もほかに求めるものはない。
濃い中身であればよい。
効率よく、必要なことを教えてほしい。
楽しくわかりやすく英語を教えてほしい。
文法などを基本から教えてほしいと思う。
リスニング力を高めるような講義。
英語を嫌にさせない話術など。
生徒を巻き込んだ活動をさせる授業がいいと思う。
英語は何でも勉強したい。

資格対策を中心に英語を勉強していたら、本当の英語の勉強にはならず、上辺だけの英語の知識になってしまうから、日常でちゃんと使える英語を教えてほしい。

指導力

ネイティブ教師には全て英語でレッスンをして欲しい。もっと学生のモチベーションが上がるようなレッスンをして欲しい。

4.6 英語授業への要望

「大学での英語の授業に関して、何か意見があったら記入してください。」という問いに対する自由記述は、表2のとおりである。学力のばらつきによる弊害が感じられる記述が含まれている。授業の焦点をどのレベルに絞るかは大きな課題である。資格対策の集中授業や、ネイティブ教師の授業への要望、英語の授業が1-2年生に集中していることについての不満も挙がっている。

表2. 英語授業への意見

わかりやすい説明をしてほしい。訳を口で言うだけだと、すぐに忘れてしまうので、板書してほしい。
もう少しレベルをあげてほしい。
講義が難しい。
どういう教材を買い、何を勉強したらよいのかよく分かりません。
私が苦手だというだけでとくにはない。
3年、2年後期に英語の授業が少ない。1年次に極端に集中している気がする。TOEICレベルアップの集中授業をしてほしい。
今ので満足している。
今までで十分よいです。
つまらない。面白くない。授業をしている意味がない。
毎回の英語の文の発表はいらないと思う。
国際交流学科以外でもネイティブの先生の授業を受けさせてほしい。
どうしてここがそうなるのかということを知りたい。

内容をもっとわかりやすく教えてほしい。
継続して英語に取り組める授業にしてほしい。 先生であるプライドを捨ててハングリーに授業してもらいたい。質の高い授業を求める。
今のクラスはやり方や進め方がとても好きなので、とても楽しいです。TOEICの必要性はとも感じますが、苦手すぎてやりたくないと思っています。
これまでの大学の英語の授業は楽しいです。
もっとリスニング訓練がしたい。
積極性はいいが、そう望んでいない学生もいるので、あまり教師側はイケイケモードはどうかと思う。

5. 長崎ウエスレヤン大学の英語教育の課題

前述のとおり、文科省の「英語が使える日本人」育成の目標の影響は各レベルでの学校教育に大きく影響を与えており、長崎ウエスレヤン大学ではTOEIC500点の英語力を保証している。TOEIC対策は必然的な課題なのである。大学英語教育は今や専門英語ESPの視点を持ち、資格検定対策に特化した取り組みを求められているのである（竹蓋他編2005）。

しかしながら、ESP教育には学生の基礎学力向上が急務である。入試の多様化に起因した学力のばらつきは教育現場における大きな問題である。本学では、新入生に対しては、入学時のプレースメントテストを始め、前期および後期授業の終了時と、年3回の全体テストを行っている。テストにはCASECという個人の能力に合わせてテスト問題を変化させていく適応型コンピューターテストを利用しており、語彙力、表現力、聴解力が試される。初回のテストの結果をもとに、必修英語科目のCALL English・英語コミュニケーション・Speaking Reading & Vocabularyと科目により基本的には3段階習熟度クラス、科目によっては国際交流学科を1クラス設けた4つのクラス分けを取り入れている。しかし、それでもまだ学力レベルの幅は大きく、授業の焦点が絞りにくいいため効果も出にくいのが現状である。

そこで、現在1年生全体に実施されている初回CASECの結果をクラス分け以外でも活用し、語彙力が大幅に不足していると判断された学生に対しては、入学時より語彙を中心に基礎英語力を伸ばすためのリメディアル講座の受講を義務付ける

など、正規授業外での対策が早急に必要であろう。1年次で行わなければ、4年次での学力保証は不可能である。また、学力保証をするならば、2・3・4年次での全体テストの実施により、随時学生の英語力を把握し、柔軟なサポート策を講じることが必要ではないだろうか。

この関連上で、本来1・2年に偏っている語学学習の機会を4年まで拡大し、学生の自主学習を促進する目的で導入されたCALLシステムも活用できるだろう。CALL教材の内容は2007年度よりアップグレードされており、最新のTOEICに対応した模試からリーディング・リスニングに加えて、基本英文法の解説や、語彙の簡単エクササイズ（意味を4択から選択するもの）が利用できる。実際この語彙練習ソフト「道場」は多くの学生に人気があり、ランキング表には学生達の面白いニックネームが連なっている。教職員へも自己啓発の一手段としてCALL利用への参加を求めたい。大学全体で語学学習を盛り上げていくという意識が重要である。また、語学情報センターが学習サポート拠点として機能することも必要である。2007年度より語学担当職員の配置が変わり、学習支援体制は弱体化の傾向にある。CALLは、単に学習できる環境を用意するだけでは不十分である。クラス外で、メンターあるいはコーディネーターが学習者の質問に答えるなどして個々の学習をサポートする体制を充実させ、学びやすい環境を整備することで、はじめて機能できるのである（清水2003、高橋2005）。

6. おわりに

以上、学生の英語資格に関する意識の分析をとおして、「英語資格検定試験における受験経験」や「英語資格の重要性」、「勉強方法に関する意識」、「教師に対する要望」を見つめることで、大学英語教育の課題へと到達した。学生のニーズには、社会のニーズや教育現場の課題が色濃く反映されているのである。

全学的に実施されている授業アンケートを利用するなどして、より細かい学生のニーズ把握に努めることは急務である。長崎ウエスレヤン大学が目指す「めんどうみの良い教育」の実現のため、学生の多様化に合わせた柔軟なプログラム形成に取り組む必要があるだろう。

参考文献

1. McInnes, S. (2005). A Comparative Survey of Students' Attitudes Toward Formal Study of the TOEIC Test Versus More Traditional Forms of English Language Acquisition. Nakamura Gakuen University Journal of Faculty of Business, Marketing and Distribution, 4, 53-56.
2. ITmedia BizID ウェブサイト (2007) URL: <http://www.itmedia.co.jp/bizid/articles/0704/18/news103.html>
3. 小野博 (2004) 「大学教育の改善－プレースメントテストとリメディアル教育教材の開発－」『04, 03大学入試センター共同企業体研究報告書』
4. 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC運営委員会 (2007) 「TOEICテスト入学試験・単位認定における活用状況」(財)国際ビジネスコミュニケーション協会
5. 清水康敬 (2003) 「～e-Learningを成功させるために～サイバーキャンパスとこれからの大学教育」http://www.shijokyo.or.jp/LINK/journal/0302/03_01.html.
6. 島谷浩 (2007) 「外部テストが一般大学生へもたらす波及効果」. 第66回東アジア英語教育研究会 西南学院大学.
7. 高橋妙子 (2004) 「学生達は授業に何を期待しているか－アンケートから」『英語教育』7月号 (Vol.53 No.4)、大修館. 28-9.
8. 高橋美知子 (2005) 「福岡大学における共通教育外国語(英語)の現状と今後の課題」『LE T Kyushu-Okinawa BULLETIN』No.5 .23-34.
9. 竹蓋幸生・水光雅則編 (2005) 「これからの大学英語教育－CALLを活かした指導システムの構築」. 岩波書店
10. 徳永美紀 (2007) 「学生は大学でのTOEIC対策に何を求めているのか」. 第21回大学英語教育学会 九州・沖縄支部 支部研究大会 久留米工業大学.
11. 文部科学省 (2003) 「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/03033101.htm

Appendix

2008年1月7日実施 (文責 林)

＜英語資格に関する意識調査＞

次の質問について、自らの直感で回答コメントに○を付けたり答えを記入してください。(裏面もあります。) 選択肢がある場合は、迷っても必ず答えを選んでください。

1. 現在長崎ウエスレヤン大学の何年生ですか。
1年生 2年生 3年生 4年生
2. 今までにTOEICまたはTOEICBridgeを受験したことがありますか。
ない
ある→ 回数と目的を教えてください。
回数 () 回、目的 () のため
3. 今までに英検を受験したことがありますか。
ない
ある→ 回数と目的を教えてください。
回数 () 回、目的 () のため
4. 今までに学校などで資格英語の授業を受講したことがありますか。
ない
ある→ どこで受講しましたか。
大学 高校 塾 予備校 その他 ()
その授業内容はどの英語資格に関係したものですか。
TOEIC 英検 TOEFL
その他 ()
5. TOEICは自分にとって重要なテストだと思いますか。
全くそう思わない
あまりそう思わない
そう思う
とてもそう思う
・理由を教えてください。
()
6. TOEICは就職に有利だと思いますか。
全くそう思わない
あまりそう思わない
そう思う
とてもそう思う
・理由を教えてください。
()
7. 一般的な英語の勉強をすれば、TOEICのスコアは伸びると思いますか。
全くそう思わない

あまりそう思わない

そう思う

とてもそう思う

- ・どんな勉強が必要だと思いますか。

(

)

8. TOEIC対策にはTOEICの問題を使った対策が必要だと思いますか。

全くそう思わない

あまりそう思わない

そう思う

とてもそう思う

9. TOEICのスコアを伸ばすのに、必要な能力は何だと思いますか。(複数回答可)

リスニング力

読解力 単語力 文法力

- ・その中でも、一番重要だと思う能力はどれですか。

リスニング力

読解力 単語力 文法力

10. TOEIC対策を教える日本人の先生はTOEICの受験経験者であるべきだと思いますか。

全くそう思わない

あまりそう思わない

そう思う

とてもそう思う

11. TOEIC対策を教えるネイティブの先生はTOEICの受験経験者であるべきだと思いますか。

全くそう思わない

あまりそう思わない

そう思う

とてもそう思う

12. TOEIC対策のクラスは日本人又はネイティブの教師では、どちらが効果的だと思いますか。

J 日本人 N ネイティブ

E どちらでも同じ

- ・理由を教えてください。

(

)

13. 今後は英語の資格試験を受験しますか。

いいえ

はい→どんな資格をどのレベルまで目指しますか。

TOEIC () 点

TOEFL () 点

英 検 () 級

その他 ()

14. TOEIC等の英語資格対策を教える教師に何を求めるか、何か意見があったら記入してください。

さい。

15. 大学での英語の授業に関して、何か意見があったら記入してください。

Thank you very much !